

平成 29 年 12 月 26 日 (火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 長塚圭史さん WS 書庫の探索と蔵書印の物語

1, 概要

長塚圭史さん 4 回目のご来館でした。本日は、恋田知子先生（当館助教）が「百鬼夜行絵巻」の解説を行った後、書庫で自由に本を選んでいただき、それらを元に青田寿美先生（当館准教授）より蔵書印についてのお話がありました。



¹ 蔵書に押し、その所有を表わす印章。

2, 書庫の探索

国文学研究資料館には大きな書庫があり、そこには多くの研究書や古典籍が収められています。地面から天井まで続く背の高い書架が部屋いっぱいにそびえ、その中にぎっしりと本が並んでいる様子は壮観です。驚き、わくわくされながら書架の間を進んでゆかれる長塚さんの姿を見て、私も最初に書庫へ入った時の興奮を思い出しました。

今回は、青田先生の講義用に蔵書印¹のある和本を選んでいただくというコンセプトでしたが、長塚さんはすべての本に興味津々のご様子。私たち教員も「こんな変なタイトルの本がある！」「この豪華な表紙の本は何でしょう」「巻物の中身が気になります」と、本を見せ合いながら書庫探索を楽しみ、結局広げて



平成 29 年 12 月 26 日 (火)

みたい和本は何でも出納することとなりました。

3, 蔵書印の物語

書庫で選んだ本以外にも、青田先生一押しの印がある和本もたくさん並び、「蔵書印データベース」²も活用しながら蔵書印についてのレクチャーが行われました。蔵書印は本来、蔵書の散逸を防ぐ機能をもつもので、先人たちの〈知〉を支えた書物の世界を再構成するには不可欠な存在です。



さまざまなエピソードの中でも、「本を海に落としてしまったことを戒めるための印」や「戦火から免れたことを記す印」など、本に対する所蔵者の思い入れを込めた蔵書印は、デザインが面白いのは勿論、本の向こう側に、かつてそれを愛した人がいたこと、そしてそれが時を越えて伝わってきたことを実感させるものでした。

4, 長塚さんからのご提案

長塚さんは、何度かのご来館を通じて、書物と人間の肉体、そして時間との関わりにご関心を強められてきたとのこと。このプロジェクトの成果として、書物を「開く」ところから立ち現れる物語—資料に触れる体験そのものを核とする劇を作りたい、と展望をお話くださいました。

さらに、「3月頃ワークショップが出来たらいいなと思っていて」とのご提案もいただきました。俳優を交えて



² http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/

平成 29 年 12 月 26 日 (火)

様々な動作を行ったり声を出したりし、方向性を見だしアイデアを固めたいとのこと。

舞台のアイデア出しの時にはよく行っておられるとのことでしたが、私たち研究者が普段行う、座って対話を行うワークショップとは随分形が異なり、どのようなものになるのかまだ想像が付きません。企画を練ってゆくのが楽しみです。

